OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学報　第221号　2009年7月19日

OCHADAI GAZETTE Summer, 2009

充実する学生のアクティビティ

色とりどりのCampus Life

CONTENTS

TOPICS

平成21年度入学式……1
　学長告辞

学生のアクティビティ……3
　お茶大TABLE FOR TWOがスタート!!
　第36回創作舞踊公演を開催
　お茶大公認サークル「Ochas」
　　新宿高島屋 第2回「大学は美味しい!!」フェアに出展
　第3回推薦音楽会を開催

教員紹介……5
　佐野浩子先生（お茶大アカデミック・プロダクション）

キャンパス点描……7
　国際シンポジウム
　　「お母さんと子どものために～私たちができること～」
　大学院オープンキャンパス開催
　Open Ocha House Seminar 開催
　本学独自の新たな奨学基金
　　「大学院生修学奨学金」授与式を開催
　中間目標期間に係る業務実績の評価結果について

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

平成２１年度入学式
学長告辞

ご入学おめでとうございます。

本日ここに 521 名の学生をお迎えすることを大変嬉しく思います。

また、新入生のご家族、関係者の皆様にはこれまでのご苦労とご努力に敬意を表し、ご入学を心からお祝い申し上げます。そして、お茶の水女子大学を支えてくださるご来賓の皆様と、本学にご支援をいただいております多くの方々に深くお礼を申し上げます。

お茶の水女子大学は、国によって設置された最も歴史のある女子高等教育機関であり、今年、創設 135 年目を迎えます。また、新制大学としては、今年が 60 周年に当たります。この間、時代が著しく推移する中でも、多くの優れた学生がこの大学で学び、そして、卒業後、国の内外のさまざまな領域で活躍し、社会を牽引してきました。それが可能であったのは、お茶の水女子大学の教育の特色に依拠していると私は理解しています。

お茶の水女子大学の教育の特徴は、少人数教育と、高度な教養教育、そして専門的思考の基礎をなす基盤的教育にあります。

少人数教育は、学生と教員・職員との距離が近く、いわば、オーダーメイドのような教育の実現が可能であることを意味します。学生は授業で発言する機会が多く、また、授業以外でも学生と教員とが親しく会話する姿がよく見られます。

昨年度からは、「21 世紀型リベラルアーツ」教育を開始いたしました。時代の変化に即した高度な教養教育は大学の重要な使命の一つです。情報化が進み、国際化が著しく、価値が多様化する現代において、大学で教授すべき教養とは何か、を教員が議論し、創り上げている教育プログラムです。

本学のこのような教育の取組みと、研究の先進的活動に対して、先月、国立大学法人評価委員会から最高の評価を得ました。国立大学は法人化されてからそれぞれに中期的な目標を定め、それに基づいて評価がなされることになりましたが、私たちは、この評価に甘んじることなく、学生の教育に力を注いで参ります。そして、学生の皆様には、この大学での日々が将来の確かな礎となることを期待しています。

大学での「学び」がこれまでと最も異なるのは、正解のない世界に身をおくことにあります。何が真であり、何が正しいか、を自ら判断する力を習得する場が大学であると私は考えています。

「cogito ergo sum われ思う、ゆえに我あり」というデカルトの命題は、考えることが人間の存在の根拠であることを表しています。考える、とは自ら考えることです。それは、他人の主張や、既に当然と思われていることを、もう一度問い直してみることでもあります。

多くの情報があふれている今日、それらを精査する力を身に付けるには、多くの知識が必要です。ですが、知識が備わっていればよいというものでもありません。大学は、これまでに蓄積されてきた知識を習得すると同時に、共に考える場でもあります。

そして、確かで緻密な知識と批判的な精神が、高度な専門的思考の基盤となります。

ところで、大学の重要な式典が行われるこの講堂は「徽音堂」と名づけられていますが、「徽音」とは、「美しい音」という意味であり、また「よい言葉」、「立派な教え」や「徳」をも意味します。新入生の皆様には、この大学で学び、「知」と「徳」を身につけ、自ら主体的に判断することの出来る人間として成長していただきたいと思います。

また、私たちの校歌は、「みがかずば　玉もかがみも　なにかせん　学びの道も　かくこそありけれ」というものです。

自らを練磨し、輝ける知性と品性を身に付けていただきたいと思いますが、目下、そのための第一歩となる新たな教育プログラムも試行を開始しています。

そして教育の場となるのは、教室や実験室だけでなく、キャンパス全体がそれにあたります。図書館もその一つです。本学の附属図書館は、国公私立大学の中で、今、最も注目されています。それは、小さいながら、多機能な空間で、毎日、学生の約半数が図書館を訪れるほど生き生きとしているからです。皆様はきっとここで多くの情報、さまざまな知識、そして大切な友人と出会うことが出来ると思います。

図書館の取組みは、小規模ではありますが、大きな大学ではなし得ないきめ細かな工夫を本学が実行した一例です。

お茶の水女子大学の教育はこのように、さまざまな場面で特色をもって展開しています。

また、お茶の水女子大学は、文字通り女子大学です。ここでは、女性に全ての役割が与えられます。この大学での経験を通して、どのようなポジションについても戸惑うことはないように訓練された、という感想をよく聞きます。

本学には、卒業生の同窓会である「桜蔭会」がありますが、同窓会の会員の皆様の多様で活発な活躍の様子からしても、お茶の水女子大学の教育が確かで有意義であると確信できます。

女性の活躍がますます求められてゆくに違いない社会状況の中で、皆様がこの大学で、その能力を存分に磨かれることを心から期待しています。

ちょうど 40 年前、私自身もこの大学に入学しました。そして、今日はじめて学長として「告辞」を述べましたが、皆様とご一緒に、私もお茶の水女子大学に新たな歴史を刻みたいと思います。

ご入学まことにおめでとうございました。

お茶の水女子大学長
羽入　佐和子

平成２１年度入学式
学長告辞

学生のアクティビティ

お茶大 TABLE FOR TWO がスタート !!

６月より、お茶大学生食堂「マルシェ」にて“TABLE FOR TWO”（以下 TFT）がスタートしました。TFT とは、先進国の私たちと開発途上国の子どもたちが時間と空間を越え食事を分かち合うという考えの社会貢献活動です。TFT ヘルシーメニューを購入すると、１食につき 20 円の寄付金が、開発途上国の子どもたちの学校給食１食分にあてられます。先進国の生活習慣病と途上国の飢餓という２つの食問題を解決するために何かできることはないか、と学生サークル Ochas インターナショナルとお茶大生協学生委員が中心となって活動を進めています。６月は、「野菜たっぷりドライカレー（398 円）」と「味噌ミルクうどん（386 円）」の２種類を週替わりで提供しました。お茶大生が考えた野菜たっぷりのメニューです。どちらも順調な売り上げを記録しており、６月１日～12 日の２週間でドライカレーは 283 食、味噌ミルクうどんは 293 食を売り上げました。お茶大 TFT が、より多くの人の、自身の健康や飢餓の問題に対する関心を持つきっかけになればと思います。後期にも実施を予定しています。また、大勢の方に召し上がっていただけるよう、メニュー開発をしていきたいと思います。

第 36 回 創作舞踊公演を開催

舞踊教育学コースは、舞踊を中心にスポーツや日常動作にわたる人間の身体活動や表現について、実践を通して多角的・総合的にその意義と特性を追究しています。毎年４月に行われる創作舞踊公演は、「卒業公演」として学びの集大成である学生の作品を発表する場です。今年は、４月 22 日（水）になかの ZERO ホールで開催されました。公演は、第１部で２年生群舞、３年生群舞、全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）大学コンクール部門特別賞受賞作品、そして卒業生上村なおかさんの作品、第２部では４年生小作品７作品、４年生群舞などが上演されました。上村なおかさんは、2002 年度文化庁新進芸術家国内研修員制度研修員に選ばれ、第 36 回舞踊批評家協会新人賞を受賞している新進気鋭の舞踊家です。４年生は、それぞれが個性溢れる作品にチャレンジし、舞踊教育学コースで学んだ成果を十分に発揮できたのではないかと思います。観客数も 600 名を超え、多くの皆様にご覧頂けたことをコース一同嬉しく思っております。

３年生群舞「Pink Elephant」

４年生小作品「フラクタル・テトラ」

４年生小作品「青い薔薇が咲くとき」

４年生小作品「凸凹凸凹」

お茶大公認サークル「Ochas」新宿高島屋 第２回「大学は美味しい！！」フェアに出展

去る６月 11 日～ 16 日、新宿高島屋で開催された「大学は美味しい！！」フェアに、お茶大公認サークル Ochas が出展しました。「大学は美味しい！！」フェア（主催 小学館）は、大学で研究開発した商品を販売するイベントです。今回は、全国２８校の大学が参加しました。

Ochas は、お茶づくりチームの開発した「ハーブ＆焙茶」、「ゆず＆ミント緑茶」、「ハーブ＆焙茶」を使って新しく商品化したパウンドケーキ「おちゃのみぃぜ」、スイーツチームの開発した「お茶とお豆のパウンドケーキ」などを販売しました。

たくさんの方にご来場いただき、みなさん、開発の苦労や工夫した点など私達の説明に熱心に耳を傾けてくださいました。たくさんのお客様と接し、普段は得られない生の声や反応を聞くことができ、とても参考になりました。これからも積極的にイベントに参加し、Ochas の目標である「多くの方々に食から得られる喜びや楽しみを伝える」活動をつづけたいと思っています。

第３回 推薦音楽会を開催

音楽表現コースは、「音楽から世界を理解しよう」をポリシーに、学問と実践の両方を本格的に学ぶことのできるコースです。

本コースでは去る5月 17 日に徽音堂にて、「第3回推薦音楽会」を開催いたしました。これは2月の「卒業／修了試験公開演奏会」に於いて、優れた成果を挙げたと各々の専門実技の教員及びコースの全専任教員より認められた学生の顕奨とお披露目を目的に、一昨年から毎年5月におこなっているものです。このような催しが可能になったのも、平成 18 年に卒業生や関係者の篤いお志と熱意により徽音堂改修工事が完了し、ドイツ・スタインウェイ社製フルコンサートグランドピアノが入ったことに因るもので、本コースといたしましては恵まれた環境に感謝している次第です。

今年度は学部卒業生４名、修士修了生３名が選ばれ、声楽はトマ作曲のオペラ≪ハムレット≫より〈狂乱のアリア〉他、ピアノはリスト作曲〈スペイン狂詩曲〉〈超絶技巧練習曲〉、スクリャービン作曲〈ソナタ第３番〉などを演奏しました。社会に巣立った出演者は勿論、上の課程に進んだ出演者にとっても、環境が変わった中で2月の公開試験以上の舞台にするのは大変な重圧ですが、皆、自己とより深く向かいあった演奏を繰り広げることができたように思います。

お蔭様でお客様も年々増加傾向になってきていますが、何と云っても舞台人はお客様との切り結びで成長させて戴く身ですので、一人でも多くの方に「演奏家としての人格の誕生」に立ち会って頂き、忌憚なきご意見を戴けましたらと存じます。卒業／修了試験公開演奏会、推薦音楽会とも、毎年日程等はホームページでご案内いたしております。どうぞ宜しくお願いいたします。

学生のアクティビティ

OCHADAI GAZETTE Summer, 2009

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は、若手研究者養成のために組織されたお茶大アカデミック・プロダクションに所属される佐野浩子先生にお話を伺います。

良い時代に生まれたことを大切にして、活かして、そして次の世代に送っていくということを意識したいと思います。

まずは、先生のご専門について教えて下さい。

私の専門は発生遺伝学です。私たちのからだをつくっている器官がどういう風につくられて、どうやって固有の機能を獲得しているか、それを遺伝子の言葉で説明したいというのが研究の目的です。

私たちのからだというのは、ヒトのからだということでしょうか。

最終的にはヒトのからだのことがわかればよいのですが、そのための研究モデルとして、ショウジョウバエを使っています。

ショウショウバエを使って研究する人が多いのはなぜなのでしょうか。

ショウジョウバエというのは、100 年以上の遺伝学の歴史を持つモデル動物なので、研究がしやすいという点があります。また、ヒトとは姿形は全然違うのですが、遺伝子で比べると7割ぐらいは同じです。ですので、ショウジョウバエでわかったことは、ヒトにも当てはまることが多いのではないかと考えています。

また、飼うのが楽という利点もあります。後でお見せしますけど、試験管に餌を寒天で固めて、その上にショウジョウバエを入れておくと、餌を食べて、卵を産んで、そして次の世代が出てくるというサイクルを試験管の中でやってくれます。スペースもとらないし、お金もかからない。そして、一世代が10日くらいなので、実験がしやすいのです。

現在、行っている実験について具体的にご説明いただけますか。

私の興味の一つは形作りです。そのモデルとして、ショウジョウバエの生殖巣を使っています。生殖巣は生殖細胞と体細胞のたった2種類の細胞からできていて、細胞数も7−80個です。だから、とても単純で研究しやすいのです。これらの細胞は、最初はバラバラなのですが、最終的には丸いきれいなかたちを作ります。生きた細胞集団が丸くなっていく過程を観察したことがありますが、細胞の動きは実に整然としていて、美しいです。何度見ても飽きないですね。是非、そのメカニズムを知りたいと思っています。

そして、もう一つの興味は、器官の機能に関してです。そのモデルとして、脂肪組織を使っています。動物には、脂肪をためる機構があり、これは飢餓を生きのびるために必要です。しかし、脂肪をためすぎると、メタボリックシンドロームや動脈硬化症になりますので、過度な肥満は命に関わる問題なのです。

肥満はどうやって生じるのでしょうか？

太りやすい人、太りにくい人がいますよね？また、ダイエットの効果はかなり不平等だと思いませんか（笑）？このようなことから、肥満には遺伝子の影響が大きいのではないかと考えられるようになりました。しかし、肥満の遺伝的原因については

ショウジョウバエという名前は猩々（しょうじょう）という、いつもお酒を飲んで目が赤い中国の伝説上の動物にちなんでつけられました。ショウジョウバエも目が赤いのです。

良くわかっていません。そこで、私たちのグループでは、ショウジョウバエを使って肥満の遺伝的メカニズムを明らかにしようと考えています。ショウジョウバエにも、ヒトと同じように脂肪組織、専門用語では fat body というのですが、そこに脂肪をため込みます。最近、この過程に関わる遺伝子が少数ですけど、わかってきたのですが、そのほとんどがヒトにもあって、同じような機能を持っています。ですので、ショウジョウバエでどうやって肥満になるのかがわかれば、ヒトの肥満の原因がわかる可能性が高い、そして治療法がわかる、そのようなビジョンを持って研究を行っています。

将来的には創薬にもつながるのでしょうか。

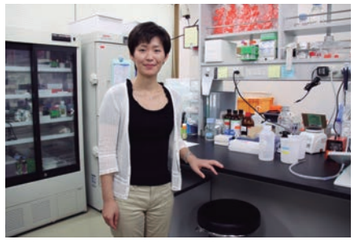
はい、そう期待しています。

次に、先生は筑波大学大学院生物科学研究科ご出身とのことですが、研究者を志した動機をお聞かせいただけますか。

はっきりした動機というものはないのですが、子どもの頃から動物が好きで、ありとあらゆる動物を飼っていました。それで、高校生になって理科系を、そして生物を選んでというように、自然に選んできたのかなあと思っています。しかし研究室に入ったときは、正直、興味としての生物と専門としての生物学のギャップに戸惑いを覚えましたし、仕事としてやっていけるのかという不安も感じました。こういう経験は、私だけではなくて、よく聞く話なのですが、振り返って思えば、ちゃんと仕事してやれるようになるには時間が必要なんですね。ですから、そこに入って、やってみて、そして決めていくしかないのかなあと思います。

例えば、大学院へ進学するとか、博士課程に進むとか、そういう節目の時に、進路の決めてとなるようなことはありましたか？

卒業研究の研究室を決めたのは、授業でショウジョウバエの体軸、前後や背腹といった軸ですね、それがどうできるかという話を岡田益吉先生から聞いたのがきっかけです。遺伝学でからだのできかたを説明できるということにとても興味を覚えました。岡田先生はその後退官されましたので、


実験台のサイズは特注で、高さが90センチあります。既成の実験台は通常80センチです。立ったまま作業することが多いので、この高さが快適なのです。また実験台の下に冷蔵庫などの物品を収納できるのも便利です。

後継者の小林悟先生の元で、生殖細胞の研究を行いました。小林先生の研究室では、vasa という遺伝子が、なぜ生殖細胞で特異的に発現するのか、という転写の研究を5年間やりました。とても厳しい研究室で、先生にはよく叱られ、セミナーの前日は毎回徹夜という生活でしたが、基礎的なことをしっかり叩き込んでもらったことにとても感謝しています。その後、すぐにアメリカに留学することになりました。

留学はどちらに行かれたのでしょうか。

留学先はニューヨーク大学医学部の Skirball（スカーボール）研究所で、ショウジョウバエの遺伝学の第一人者の一人である Ruth Lehmann（ルース・レーマン）博士の研究室に行きました。彼女の論文はそれまでにも読んでいて、研究にとても関心を持っていたのですが、たまたま日本の学会で会う機会がありました。私は、その学会でポスター発表をしていたのですが、それを持って、直接彼女のところへ行って、私はこんな仕事をしていますと話をさせてもらいました。それから1〜2年たって、留学先を探す時に、彼女にメールを書いてみましたら、彼女もこのときのことを覚えていて、インタビューに呼んでもらうことができました。

学会での積極的な行動が留学先を決めるきっかけになったのですね。

はい。面識もない大先生に対して、いきなり直訴のようなことをしたわけで、今思えば、大胆なことをしたと思います。でも、結果的には良かったですね。ただ、当時の留学は、メールや手紙のやりとりで決めたり、知り合いのポスドクの継続のような形が普通だったのですが、私の場合は、いきなりインタビューに来いと言われてしまいました。あわてて準備をして、そして、かなり緊張してインタビューに行きました。人生初の英語での発表でしたし、自分の研究の発表をするだけではなくて、向こうのラボのメンバー15名くらいと30分くらいずつ話をするというメニューが組まれていて、終わったときにはもうへとへとでした。帰りのニューヨークの空港では、乗務員の休憩所で休ませてもらったりしたんですよ。

留学先の先生も女性ということですが、研究環境はいかがでしたか。

私のボスだった Ruth Lehmann（ルース・レーマン）先生は女性ですし、その先生の、Nüsslein-Volhard（ニュースライン・フォルハルト）博士（1995 年ノーベル医学生理学賞受賞、本学名誉教授）も女性という、女系研究室（?）でした。そのせいか、女性だから特になんだということはありませんでした。アメリカでは、もう性別による差別はほとんどなくて、自分がいた部局のプロフェッサーも半分以上は女性でした。だから、自然な環境で、気負うことなくできたと思います。

家庭と仕事の両立という観点からはいかがでしょうか。

向こうでは、家庭があるからといって、女性が仕事を犠牲にするということはほとんどありませんでした。両立は大変なのですが、やれる努力はすべてやるという感じです。人を雇う、近くに住む、パートナーは全面的に協力、とかですね。そうすると、生産性は下がらないんです。夫婦ともにアカデミックでキャリアを積んでいくケースが多いのですが、お互いの仕事を大事にするというのは素敵だなあと思いました。ただ、ボスが何気なく、「私の時代は結婚とか家庭なんて考えられなかった。いい時代になったね。」と言ったことがあります。おそらく、これまでの間、たくさんの人たちの努力があったと思いますし、諦めざるを得なかった人もいたと思います。良い時代に生まれたことを大切にして、活かして、そして次の世代に送っていくということを意識したいと思います。

留学は何年くらい前のことですか。

7年前です。2002年4月から2008年3月までです。6月にインタビューに行って、さあニューヨークへ行くぞというときにテロが起こったのです。とてもびっくりして、ラボもなくなってしまったのではないかと思ったのですが、幸いそういうことはなく、半年後に渡米しました。

アメリカの生活はずいぶん長かったのですね。

そうですね。はじめは2〜3年間と思っていたのですが、私たちの分野の仕事はわりと時間がかかるので、普通でも5〜6年、長い人は10年くらいいることもあります。

アメリカでポジションをとろうという気持ちにはなったのでしょうか。日本に戻ってこようと思ったきっかけはあったのでしょうか。

6年もいるとどちらでも良いという気持ちになってきます。私の場合、日本での就職のチャンスの方が早かったので、帰ってくることになりました。ただ、向こうに長くいて思うのは、日本人でも海外で職を得るチャンスはあるんですね。可能性は広いと思いました。特に、学位を持っている人はいろいろな分野で活躍できるということを実感しました。

学位は重要でしょうか。

持っているかどうかで全く違います。Ph.D. を持っている人の進路は、アカデミックもありますが、バイオテクノロジー関係の会社はもちろん、銀行とか証券会社、コンサルテイング、行政や政治関係などにも行きます。なぜ、そういうところで採用してもらえるのかと採用担当者に聞いてみたことがあるのですが、Ph.D. コースというのは、自分で問題を設定して、それを解決するという能力を鍛えている。そのプロセスはどういう分野でも通用するし、それを5年間もやってきたのなら素晴らしい人材に違いない、と言うんです。科学の知識というよりも、思考とか問題解決能力をかってくれるんですね。そして、分野が違っていても活躍するだろうという将来性を見てくれるんです。これはとても新鮮でした。

話は変わりますが、アカプロに研究の場をおくことになりましたが、いかがお感じですか。

アカプロは、かなり分野の違う人が集まっています。理論物理、理論化学、実験化学、生物、ユビキタスなどです。最初は、会話が成り立たないんじゃないかと不安でした。ですが、来てみると、お互いにわかるように努力するせいか、意外と理解できるのですね。それで、せっかく一緒にいるのだから、何か一緒にやってみようということで、共同研究を立ち上げたり、議論したりしています。

分野の違う人の集まりが、自分の専門外のことを取り入れるチャンスになっているということですか。

はい。よく学際的ということが言われると思うのですが、普通、違う分野の研究というのは、組織も場所も離れていますよね。だから、話す機会もあまり無いんです。アカプロの場合は、同じ場所にいるから話すことができるんだと思いました。共同研究も、雑談みたいなところから、始まったりするんですよ。そういう意味で、とてもユニークな組織だと思います。

最後に、お茶大生や、これから大学受験を志している高校生に一言お願いします。

自分に言い聞かせていることなのですが、いつもポジティブに、前向きであることが、道を切り開くと思っています。また、自分が興味を持っていることに、自信を持って進んでいく、そうすれば、いろいろな人との出会いもあると思います。是非、お茶の水女子大学で、そういうチャンスを手に入れて欲しいと思います。

本日はどうも有り難うございました。

学生の皆さん、アポなしでかまいませんので、いつでも実験室の見学にきてください。

聞き手：棚谷　綾
（人間文化創成科学研究科先端融合系　准教授）

論文の図が研究雑誌の表紙を飾りました。生殖細胞がこれから移動する方向に向って放射状に並んだところが、あたかも花びらのように見えます。

キャンパス点描

国際シンポジウム
「お母さんと子どものために～私たちができること～」

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、７月４日（土）に国連大学ウ・タント国際会議場で国際シンポジウム「お母さんと子どものために～私たちができること～」を開催いたしました。本シンポジウムは、お茶の水女子大学グローバル協力センターが主催し、国連人口基金東京事務所及び特定非営利活動法人　HANDS（Health and Development Service）との共催での開催です。

第１部では、「世界の現場を知る」をテーマに、NHK 国際部記者の西川光子氏から、チャドの過酷な出産現場の現実に関する紹介が映像とともになされ、希望の学校代表で、本学グローバル協力センター客員准教授でもある駿渓（スルタニ）トロペカイ氏からは、アフガニスタンの女性と子どもの教育の現状から、アフガニスタンの復興支援に最も必要なものは「水」と「教育」であることを訴えられるなど、私たちが普段なかなか聞くことのできない貴重なお話を伺うことができました。

また、第２部は、「日本の現場：私たちができること」をテーマに、専門家によるコメントのほか、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、お茶の水女子大学の在学生、卒業生が、それぞれの立場から自分たちが取り組んでいること、考えていることについて発表がおこなわれました。「私たちができること」には、「直接的、半間接的、間接的と様々な段階があるが、それは全て開発途上国の人々とつながっている」という登壇者のコメントには、世代を問わず、来場者の多くの方々が新たな見解を得られたようでした。

当日は、会場のウ・タントホールが満席となり、国内外から 380 名を超える来場者におこしいただきました。学生をはじめ、多くの方々が熱心に開発途上国の現実に耳を傾けられ、それに対して「私たちができること」について真剣に考えられていらっしゃる熱気が感じられたシンポジウムとなりました。

大学院オープンキャンパス開催

昨年に引き続き、４月２５日に「大学院オープンキャンパス（受験生説明会）」を開催しました。

今年は３００名を超える多くの方にご来場いただき、大学講堂（徽音堂）で羽入佐和子学長からは、本学の教育の目標、特色について説明があり、耳塚寛明教育機構長、市古夏生大学院人間文化創成科学研究科長からは、本学大学院の特色と教育研究活動状況全般について説明が行われました。

全体説明会の後、博士後期課程では指導教員の紹介とその指導教員から直接説明を聞く機会を設け、博士前期課程では各専攻コース別に分かれて説明会が実施されました。

また、受験、履修・カリキュラム、奨学金、学生宿舎、就職、留学などの各種相談コーナーが設けられ、多くの方が相談に訪れていました。

Open Ocha House Seminar 開催

お茶の水女子大学では、平成１９年度より特別教育研究費による「女性が進出できる新しい研究分野の開拓」事業に取り組んでおり、その一環である「生活者の視点を重視したユビキタスコンピューティング住宅の研究」において、計画してきた「実験住宅」が、このたび竣工しました。「家」を対象としたコンピューティングのための実験住宅建設は、国内の大学では初めての試みです。

ユビキタスコンピューティング実験住宅では、小型安価となった日用品としてのコンピュータを住環境に埋め込むことで、日常生活におけるコンピュータの新しい利用の可能性を拓く研究を目指します。衣食住に密着したコンピュータアプリケーションとして、個人が所有する服の写真データベースを簡単に作成するタンス、食育情報などを食卓に提示する仮想現実システム、住宅の中での家族の様子を音楽で知らせるオルゴールなどを提案・試作しています。

この実験住宅を活用して「女性ならではの視点」を生かしたユビキタスコンピューティング実証研究を一層深化させ、さらに女性が進出できる新しい研究分野の開拓を進めるために、シンポジウム並びに実験住宅お披露目会「Open Ocha House Seminar」を開催しました。

キャンパス点描

本学独自の新たな奨学基金「大学院生修学奨学金」授与式を開催

6月10日(水)、本学独自の新たな奨学金である「お茶の水女子大学大学院生修学奨学金」の授与式がおこなわれました。

この奨学金制度は、お茶の水女子大学（新制大学）創立60周年を記念して、学生の修学支援を目的とした寄附金事業の一つとして創設されたものです。

奨学金の目的は、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科に在籍する学生で、経済的理由により修学が困難な学生に対し奨学金を授与することにより、大学院における修学及び研究生活を支援することを目的とした奨学金で、今年が最初の授与となります。

平成21年度においては、大学院博士前期課程ジェンダー社会科学専攻1名、博士後期課程ジェンダー学際研究専攻1名、博士後期課程人間発達科学専攻1名の計3名の大学院生に贈られました。

授与式は、研究科長等関係の教員臨席のもと、3名の受賞者に対して羽入佐和子学長から一人ひとり賞状と奨学金が手渡され、お祝いと励ましの言葉が述べられました。

なお、受賞の対象となる者は、本学大学院博士前期課程及び後期課程の1年次に在籍する学生で、経済的理由により修学が困難（授業料の全額又は半額免除の資格を有する者）であり、学業成績が優秀で、かつ、次のいずれかに該当する者です。

（1）寄附者が指定する大学院の課程等に学んでいる者

（2）大学院修了後に幼稚園・小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・特別支援学校の教員及び養護教員の職を強い志を持って目指す者

支援する奨学金の額は、大学院博士前期課程100万円（1年につき50万円とし、2年間支給）、大学院博士後期課程100万円（1年目40万円、2年目及び3年目は30万円）です。

中間目標期間に係る業務実績の評価結果について

平成21年3月26日、国立大学法人評価委員会から「中期目標期間の業務の実績に関する評価の結果」が公表されました。

この評価は、平成16年度から19年度までの4年間の中期目標の達成状況評価で、Ⅰ「教育研究等の質の向上の状況」の目標についての3項目と、Ⅱ「業務運営・財務内容等の状況」に関する4項目の評価がされています。

本学は、評価対象となった90法人の中で、「教育」では上位11法人内に、「研究」では上位3法人、「その他（社会連携・国際交流等）」では上位2法人のうちに位置づけられ、全体として国立大学法人の中ではきわめて高い評価を得ました。

特色ある例として、とくに本学の6事例が紹介されています。

例えば、「教育の成果」として高大連携特別選抜等が、「研究実施体制等の整備」として女性教員数の増加、「国際交流、国際貢献の推進」として五女子大学コンソーシアムの活動が紹介されているほか、教員の欠員ポストをすべて学長手持ちとして「ターゲット型採用」を実施している点、企画経営統括本部における業務運営の効率化の実施とウェブサイトでの公表、「危機管理マニュアル」を作成して全学的連絡体制を確立している点が「危機管理への対応」の例として特記されています。

「非常に優れている」　（5段階中最上位）　3項目（研究、社会連携・国際交流、業務運営）
「良好」　（5段階中2番目）　3項目（教育、財務、自己点検・評価・情報提供）
「おおむね良好」　（5段階中3番目）　1項目（その他業務運営）

これらの評定は、各法人の中期目標・中期計画に則して行うものですが、下記の表のとおり、全国の国立大学法人のなかでも、特筆すべき評価にあるといえます。

	教育	研究	社会連携 国際交流	業務運営	財務内容	自己点検 評　価 情報提供	その他 業務運営
非常に優れている	1法人	3法人	2法人	11法人	3法人	2法人	2法人
良好	10法人	27法人	34法人	56法人	83法人	84法人	75法人
おおむね良好	79法人	60法人	54法人	18法人	1法人	2法人	11法人
不十分	0法人	0法人	0法人	5法人	3法人	2法人	2法人
重大な改善事項あり	0法人	0法人	0法人	0法人	0法人	0法人	0法人

『日刊工業新聞』（3月27日朝刊）では「お茶大が健闘」と本学の名を挙げ、「非常に優れている」との評価項目を得た大学名を掲載しています。

お茶大：3項目
東工大：2項目
その他の15大学：1項目
情報・システム研究機構：2項目
高エネルギー加速器研究機構：1項目

また、『朝日新聞』（3月30日朝刊）には、「国立大学の中期目標達成状況の評価」一覧が掲載されています。

本学が高い評価をえられた理由は、下記の点にあると考えます。

A．中期目標・計画が適切且つユニークであったこと
B．目標を達成するために学長が強いリーダーシップを発揮したこと
C．その結果、全学を挙げて目標に向かって取り組みを行ったこと
D．目標達成のための改革を速いスピードで行ったこと

お茶の水女子大学学報　第 221 号
▽発行日：2009 年 7 月 19 日
▽発　行：国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚 2-1-1（〒 112-8610）

ご意見・ご感想はこちらまで
学術・情報機構広報チーム
電話　03-5978-5105
FAX　03-5978-5545
E-mail：info@cc.ocha.ac.jp
URL　：http://www.ocha.ac.jp/

Copyright (C) 2009 Ochanomizu University. All Rights Reserved